

「入」 口2500人の小さい村だからこそ教育が大切だ」

公立の小中一貫校である東峰学園校長の松澤文人先生は力説する。都市部では「中1ギャップ」解消のために小中一貫を導入しているが、東峰村では過疎地脱却のためだ。小さな村でも都会以上の教育が受けられることを示して、子育て世代に定住してほしいというのだ。その自慢の教育の一つが、築山真由美先生の授業だ。

声の大きさと滑舌を意識させる

授業を見学して、いきなり驚いた。国語の時間なのにオルガンに向かうのだ。「今日は『あくびが出るよ』の歌を歌いましょう。最初はネズミさんになってあくびをします」とドミソソソミドの音階で「あくびがでるよ。あー、あー」と歌う。次は犬、ライオン、カバと続く。授業では時折「1の声」「2の声」と指示する。「1の声」は小さな声、「2の声」は普通の声、「3の声」は教室内で話す大きな声、「4の声」は屋外で出す大声だ。要は声の大きさを、動物名や数字で子どもに教えているのだ。次にやったのは「口の体操」。

子どもがシャキーンとする魔法の言葉を実践

福岡県東峰村
東峰学園小学1年担任

つきやま ま ゆ み
築山真由美先生

教育を元気にする先進的な取り組み

2011年4月に福岡県東峰村が設立した東峰学園には視察者がよく訪れる。その日も某市の教育長が小中一貫校の導入例を視察していた。しかし私の目的は「魔法」とうわさされる授業の見学。一体、どんな授業をしているのか。

取材・撮影・文／石井 至

（口の体操 実践のコツ）

敏感な子どもは大人が冷めているとやらなくなるので、先生自身も恥ずかしがらずにやるのがポイント。子どもが小さいときは音声表現と姿勢が大事。滑舌が悪いと、「がっこう」を「らっこう」と言うので、字で書くときも「らっこう」と書いてしまう。高学年を担当するとわかるのは1年生が大事ということ。高学年になってから指導しても、国語の力はなかなか上がらないのだ。

滑舌をよくするためだという。写真のように「あ」「い」「う」「え」「お」とやる。最後の「お」のときは、ポーズのまま、その場でケンケンしながら一周。子どもたちもさることながら、築山先生も楽しそうだ。最後に、光村図書国語デジタル教科書「うたにあわせて あいうえお」の歌に合わせてポーズだ。

「ピタ、ピン、ピン」で子どもをシャキッと

けることを意味する。最初の「ピン」は背筋をピンと伸ばす、最後の「ピン」は教科書を持つ腕をピンと伸ばすということだ。そして築山先生は音読なのにタンバリンを持った。音読中、タンバリンでリズムを刻む。そうすることでクラスの子どもたちが一緒にテンポよく音読できるのだ。最後に、特別に「十つくり歌」も披露してくれた。「きらきら星」の歌に合わせて、「1とり、2と8」と歌う。10の補数を覚える歌だ。10の補数は、繰り上がり、繰り下がり、計算の基礎になる。こうした勉強の基礎をしっかりと身に付けさせる築山先生の授業。そこには、子どもが自然と集中する工夫が満載だ。

Q どうしてこのような授業を？

A 小学1年生には「これは大事だから覚えてね」は通用しない。面白く楽しく取り組めるからこそ、記憶するのです。

Q 子どもを集中させるには？

A 「視覚的に、シンプルに」が原則。短いフレーズで繰り返すのがコツです。

音読のときは
タンバリンでリズムをとる。



音読中



え



お



い



う



あ